

図8：神経症の主体における四つのディスクール

*N
(結節点1)

#8.1
*M
(図7) → 神経症的な欲望の主体が対象aを
「（〈父〉により解決される）問題」
とすると、
→ 主体はその問題に対して
「（〈父〉という）根拠」と
「（問題が解決された結果である）結論」が
存在すると信じている。

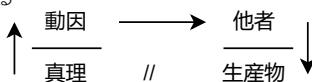
#8.2 このように解釈をするとき、

- ・ a:
対象あるいは残余a。
転じて、予測誤差としての不確実性、
加えて、そこにファルスが与えられるべきとされるもの
- ・ \$:
欲望の主体。対象aの解消を試みてシニフィアンを操作する
- ・ S1:
象徴的父。転じて、
シニフィアンを連鎖させて構築する「言説」の根拠であり、
根拠の選択の仕方により規定される
「問いの枠組み（プロブレマティク）」
- ・ S2:
象徴的父がもたらす法。転じて、言説の結論であり、
問いの枠組みにおいて根拠に従属する諸命題

の四つの要素を用いて、
神経症者の思考や行動を表現する
右記の「四つのディスクール」を描くことができる。

#8.3 四つのディススクールを構成する
各位置には、
右のような役割がある。

- ・ 主体が当初
同一化しているものが
真理である
- ・ 真理には十全でないところがあり、
それが動因を発生させる
- ・ 動因は他者に働きかけ、他者は生産物を算出する
- ・ 生産物は真理を十全にすべく生じたものだが、
それは実現しない



#8.4

分離が始まる瞬間
(=エディプス第二の時)に

対応するのが、

右の「分析家のディスクール」である。

・主体は既存のシニフィアンの体系 (=S2) に
同一化している

・シニフィアンの体系には非一貫性があり、

予測誤差としての残余aが生じる

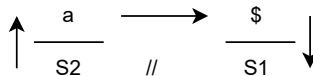
・残余aは主体 (=S) を作動させ、

主体は革新的な視点 (=S1) を得る

・新たな視点は既存のシニフィアンの体系と調和せず (=S2//S1) 、
シニフィアンの体系を組みかえはじめる

このディスクールは不安定であり、

速やかに下記の「主人のディスクール」へと移行する。



#8.5

父性隠喩を確立する段階

(=「エディプス第三の時」)に

対応するのが、

右の主人のディスクールである。

・主体 (=S) は新たな根拠となるシニフィアン (=S1) を生み出す

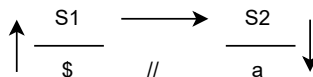
・新たな根拠に基づいて様々な命題が生み出されていく (=S1→S2)

・しかし、そうして構築された新たなシニフィアンの体系にも
非一貫性 (=a) がある

・この非一貫性は、このディスクールで最初に欲望の主体が
解消しようとしたものとは異なる新たな残余aである

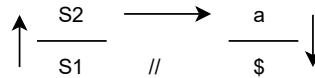
・生み出された残余aと主体との間には断絶があるが (=S//a) 、
主体はこの断絶が克服されるものなのだという

幻想を信じている (=S◇a)



#8.6

確立した父性隠喩について、
現実的父に同一化し
象徴的ファルスを持っていると
思いたい者は

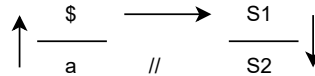


右の「大学のディスクール」を好むようになる。

- ・主体(= \$)は言説の根拠(= S1)を所持する者に同一化している
- ・言説の根拠はそれ単独ではシニフィアンの体系を形成できず、自身に基づいた様々な命題を持っている(= S2/S1)
- ・様々な命題は、新たな残余aを
既存の問いの枠組みを保持したまま解決しようとする(= S2 → a)
- ・だが、その試みは不徹底に終わり、
新たな欲望の主体(= \$)を発生させる
- ・しかし、新たな欲望の主体に従って
再びシニフィアンの体系を組みかえることは、
現在の主体の同一化を放棄させることを意味するので、
この新たな欲望の主体は抑圧される。

#8.7

確立した父性隠喩について、
象徴的ファルスに同一化し
現実的父に欲望されることを
欲望する者は



右の「ヒステリー者のディスクール」を好むようになる。

- ・主体は、
対象aの位置に来るべき象徴的ファルスに同一化するために、
ファルスに仮装する(= \$/a)
- ・仮装した主体は自身では対象aを解消できない
- ・仮装した主体は対象aを解消すべく、
現実的父になりえそうな他者に働きかけて(= \$ → S1)
様々な命題を吐き出させる(= \$ → S1/S2)
- ・しかし、いかなる命題も対象aそのものを
根絶することはない(= a//S2)
- ・そのため、それらの命題の根拠(= S1)も失墜する